

## 特定研究開発促進事業（抄録） （イワガキの再生産機構の解明）

勢村 均・石田健次

イワガキは、従来日本海側の数県で特産的に漁獲されていたが、近年食材の多様化と流通の広域化により、関東、関西方面での需要が増加した。それに伴い、漁獲を増加させたため、一部の漁場ではすでに乱獲の傾向が明瞭になっている。

島根県では、もともと本種は漁獲の対象とはなっておらず、隠岐島の養殖業者が試験的に人工種苗生産と養殖を行っていた。そこで、本研究で、本種の人工種苗生産の安定化と養殖可能水域の拡大の可能性を調査することにより、本種の導入による本県の貝類養殖の拡大と安定化を図る。なお、この事業は、平成7年度より5年間の予定で開始されており、毎年報告書が、提出されているので、ここでは要約を掲載する。

### 要 約

1. 成長観察に適した部位：人工種苗生産後1年経過するまでの個体では、上貝柱痕と殻長以外の形質が全容積と相関が高く、成長をよく表わすと考えられた。また、1年以上経過した個体では、全重量と下殻重量および全高または殻高との相関が高く、成長をよく表わすと考えられた。
2. 成熟と産卵期：成熟度および卵径の変化から、産卵期は雄、雌ともに6月から8月にかけてと、10月から11月にかけての2回あると考えられた。
3. 人工種苗生産：1ミクロンの簡易ろ過海水をもちい、水温25℃前後で、当初の幼生収容数を2個体/ml、餌料として Isochrysis を1,000細胞/mlから順次増加し、最終的に Isochrysis,Pavlova 混合で15,000細胞/mlとしたときに変態期幼生での生残率が55%となった。また、細菌相は、好調不調の水槽間で異なった。

\*詳細は、平成7年度特定研究開発促進事業報告書（イワガキの再生産機構の解明）を参照のこと。